「滑稽俳句の前に…」

藤森荘吉

「この先を考へてゐる豆のつる（吉川英治）」
多摩川の上流、御岳近くの青梅市内に吉川英治記念館があり、そこで求めた文庫本でこの句に出合いました。擬人化も、「滑稽」というか、ほのぼのとした俳味のひとつを生みます。あっ、そうそう「俳味だっ、俳味！」これですね。また広辞苑『俳味』―俳諧的な味わい。飄逸・洒脱の要素を持つ庶民的な趣味。俳諧味。なあるほど、庶民の熊さんも出てきましたし、飄逸・洒脱なんて中々良い響き。この辺が私の「良い句」の基本にほぼぴったりです。…と、今回はです・ます調で書かせて貰ってます。

さあて、ところで、こないだ私の「滑稽俳句」を見せたら、「それ、川柳じゃん」と言われました。川柳と滑稽俳句の協会、じゃなくて境界となるとどうでしょう。はい、広辞苑。『川柳』―（読者が退屈するので故事来歴の記述を省略し）切れ字・季節などの制約がない。多く口語を用い、人情・風俗、人生の弱点、世態の欠陥等をうがち、簡潔・滑稽・機知・風刺・奇警が特色。江戸末期のものは低俗に堕し狂句と呼ばれた（注：今は江戸末期ではないので当該記述は当て嵌らないでしょう）。中々具体的に規定しているではありませんか。でも季題を含む「川柳」があると「滑稽俳句」との境界は曖昧。まあ、境界にこだわってもこだわらなくっても良い俳句の価値は変わらない。私は一応「川柳の大家がこれは川柳ではあるまい」というのを「滑稽俳句」だと第三者には言っておこうと思っています。実作者にとっては、作品の共感性が高ければ、川柳・俳句・自由律の境界がどうであろうと作品の価値は何ら変わりますまい。

「冗談・洒落と言葉遊び・ギャグ」―「滑稽俳句」そのものに入る前に、滑稽の原点、「微苦笑を誘う」辺りに触れておきましょう。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

冗談―「あいつ頭から血を流してるぞ」「ああ、彼は秀才なんで頭が切れるんです」／「わが社は一部上場会社でして…」「ああ全部じゃないんだ」。そう、『冗談から駒』ふざけ半分も見ようで事実。

洒落―日本語には同音異義語が多い。校歌・高価・降下・高架・効果・硬貨など。「頭の回転が速い人は脳高速（梗塞）」「頭で勝負だ脳決戦（血栓）」「君のシャツでもワイシャツ」「試合に負けてもカッターシャツ」

言葉遊び―色々ありますが《山号寺号》「金龍山浅草寺」「時計屋さん今何時」「桃太郎さん鬼退治」《電話番号語呂合わせ》「歯医者さん＝四六一八：白い歯」「救急病院＝一〇一九：今行く」「付き合いのいい友人＝二五一四：都合いいよ」《人名》真締杉郎（まじめすぎろう）、佐堀太郎（さぼりたろう）、鳥越九郎（とりこしくろう）《頭音転換／スプーナリズム》「生まで朝テレビ」「りょんきん・えーよー眼鏡」「やわばた・かすなり」～まだまだ色々あります。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。